

うっかりメイの実験レポート

「僕は物心ついた時から幸せだったよ」
未だ消灯が完全でないビルを背景に唐突に女はそう言った。一瞬私は彼女が何を言っているのか理解できなかった。ビルの屋上に設置されたフェンスの向こう側で今にも飛び降りそうな人が幸せだって？あまつさえ狐の仮面をしているから素性も知れない。

「ならなぜ」

「おっと、そんな質問は無粋だよ。警備員さんは僕を見て哀れで絶望の淵にいる人間に映るかもしれない。しかし僕は幸せさ。そうだ、あなたに僕の幸福の証人になってもらおう」

仮面は穏やかな風いだ海面のような表情を浮かべていた。私はおとなしく話を聞くことにした。

僕の生まれは海辺の田舎町だった。父はしがない銀行員で、母は普通の主婦だった。お金はなかったが、何不自由ない一般的な家庭だったよ。自然が豊かな場所だね。暑い時も、寒い時も、綺麗な石や貝殻が取れる海で泳いだり、雪の積もった山の頂上で友達と雪合戦したのを覚えてる。小学校に上がる前にお父さんが標本採取を教えてくれたんだ。その頃の僕は捕まえたセミとか蝶をどんなに大切に育てても、いつかは死んでしまうのを見て悲しんでいた。そんな僕を見かねて死んだ虫を丁寧に洗って乾かして箱に保存する方法を教えてくれた。あまりにも嬉しくて僕は捕まえた虫が死んじゃったら標本にして保管することにしたんだ。僕の剥製作りと並ぶ特技さ。

小学校の三年生の時にね、授業で農家の人たちと半年間ジャガイモを育てようっていう授業があったんだ。春に種のイモを植えて夏休みに入る前に収穫をする。収穫したジャガイモと農家の人が別で育ててくれた人参や玉

ねぎ、牛肉、米でカレーライスを作るという内容だね。

僕が一番好きだった授業だよ。芽が出て、徐々に大きくなって、花が咲いたら摘み取らなくちゃいけないのが残念だったけど。収穫の時はクラスみんなで地面を掘ったのを覚えてるよ。男の子のグループで誰が一番大きいのを取れたか勝負したりしたなあ。僕はというと、友達とぶざけ合っていると転んで泥まみれになってしまつてね。先生にこつぴどく叱られた。けど農家の人たちは笑って家上げてくれて、服を洗濯してくれた。洗濯している間、僕は農家のおばさんに話を聞いてみたんだ。なんでジャガイモの白い花を摘み取っちゃうのか、って。

『それはね、私たちが幸せにするためだよ』

おばさんはそういった。どういう意味なのか全く分からなかったから多分困った顔をしていたと思う。

『どういう意味なの？』

『花を摘み取るとね、ジャガイモが美味しくなるのよ。』

美味しいもの食べると幸せになるじゃない？』

『うん！』

そこまで聞いて僕は不思議に思った。ジャガイモは花を摘み取られて幸せなのだろうか？と。

『ねえねえ、ジャガイモさんは不幸じゃないの？』

『ジャガイモさんが？』

『だって体の一部がちぎられるんだよね？ 痛くないの？』

『あらまあ、考えたことなかったわねえ』

おばさんはしばらく考え込んでいたけど、とても素敵な返答をくれた。

『ジャガイモさんはね、それでも幸せだと思うの。体の一部がなくなっても、美味しくなってみんなをもつと幸せにできるから。ボク君は今日みんな収穫していて楽

しかった？』

『楽しかったよ！』

『そう。なら私も嬉しいわ。私が農家の人をやっているのはね、私が育てたもので他の人が幸せになってくれるからなの。他の人が美味しいもの食べて、美味しいっていつてくれて、幸せになってくれるなら、私も嬉しくて幸せなの』

『他の人が幸せになると僕も幸せ……？』

『そうよ。だからジャガイモさんも私たちが美味しく食べてくれて幸せなら幸せなのよ』

おばさんの言葉は今でも覚えているよ。相手が幸せなら自分も幸せ。自分が幸せなら相手も幸せ。その頃から誰かを幸せにする生き方をするんだってぼんやりと思っただ。

彼女の話をただの生い立ちにすぎなかった。彼女が自殺しようとする動機とイマイチ結びつかない。

『小学生の思い出話か。この状況にどう関係するのかよくわからないな。幸せというワードが出たには出たが』

『話はまだ終わっていないよ。君は証人なんだから最後まで聞いてくれ給えよ』

中学生の頃、僕は一つの問題に直面していた。小学校を卒業するまで、僕は町の人々に今幸せか聞いて回ったんだ。僕のお父さんとお母さんも含めてほとんどの人が幸せだって答えてくれた。だけど中には不幸だ、っていう人もいて僕は悲しかった。どうすればこの町のみんなを幸せにできるかよく考えたよ。お父さんやお母さん、小学校や中学校の担任の先生に聞いた。どうすればみんなを幸せにできるか？って。みんな答えが違ってたけど、

共通する答えを探すとボランティアをするといんじやないか？という結論になった。そうだ。なんで不幸なのか聞いて人助けをするボランティアをすればいいんだ。不幸の原因を取り除いてあげれば幸せになる、と思いついたんだ。

そう考えた日、いろいろな不幸だと言っている人に話を聞いた。そしてどうすれば幸せになれるか、考えて行動するようになった。死ぬ前に自分の夫の墓の前で手を合わせたい、って言う寝たきりのおばあさんを担いで山に登ったり。自分の息子が登校拒否で困っている、と言う母親に代わって男の子を説得したり。仕事に時間を取られて自分の息子と遊ぶ時間がないって言う会社勤めの男の人の代わりに会社に直談判に行ったり。

随分いろいろなところに行つたものだと思う。町長から賞状をもらつたりもした。けど、最後の人の頼みは一番難しかったなあ。

最後の人は町外れの山の麓に住むおじいさんだった。昔は猟師をしていたらしく家の中には立派な鹿の頭の剥製やクマの毛皮が敷いてあつたりした。彼の不幸は一つだった。

『他人が幸せなのが不幸だ』

『え？』

『だから言っておろ。他人が幸せなことがワシの不幸だ。だからこんな町から離れているところに住んでいるのだ』

『でも、他の人が幸せなら僕は幸せですよ？』

『知らん。それはお主の主観だろう。ワシはそうではない』

僕はとても困つたよ。今まで人助けをしていたのはみんなに幸せになつてもらいたかつたからさ。そうするこ

とで僕も幸せになれる。だが猟師のおじいさんは無茶なことを言う。みんなが不幸になれば自分が最大限の幸福を得る、と言うんだからね。だぶ考えたよ。毎日おじいさんの元へ通いつめて話をした。おじいさんは質問すれば大抵のことには答えてくれた。猟師生活のこととか、一緒に猟をしていた愛犬の話とか、死んでしまった奥さんのこととか。お話しするだけでなく、思いつく解決策は全て試した。一緒に愛犬や奥様のお墓を掃除したり、山に山菜を取りに行ったり、お使いを頼まれたこともあった。おじいさんと交流を始めてから数ヶ月だろうか？町の人は偏屈な爺さんだ、と思つていたようだが、僕から見れば素直でないだけなのではないか、と感じ始めていた。他人の不幸が自分の幸せだ、と言つてはいたが、彼が奥さんのことを大事にしていたのは奥さんの部屋を毎日丁寧に掃除していたことを見ていたらわかるし、愛犬の犬小屋や首輪の鈴の手入れを欠かさなかつたことを見れば相棒のことを片時も忘れていないことがよくわかつた。猟で仕留めた鹿や猪のことを忘れておらず、自然に対する敬意をいつも持つていることもわかつた。山で出会つた人に対しては挨拶を欠かさなかつたし、買い物のために町に出ている時も、人に小言を言うことをあつても礼を失することはなかつたと記憶している。そんな彼が本当に他人の不幸が自分の幸せだと本気で言っているのか？僕ははともそんな風には見えなかつた。なおじいさんの本当の不幸とは？

答えが出ないまま一年がすぎた。僕はもう中学三年生で受験が迫っていた。必然的におじいさんの家に行く機会もめつきり減つた。そして、受験直前の追い込みに入った時期のある日のことだつた。その日は雪が降り積もつたせいで塾のある隣町へ行くバスも電車も止まつてお

り、久しぶりにおじいさんの家に行くことにした。おじいさんは倒れていた。急いでベッドへ運び、暖炉に薪を追加して部屋の温度を上げたり、お湯を沸かしているようにやく目を覚ました。

『ワシは妻に先立たれてから、一人でいることに慣れてしまっていた。他人の死を目の前にしたあの日から自分もその日が来るのだということをいやが応にも感じざるを得なかった。そしてその時が来れば当然ワシ一人でこの家で朽ち果てるのだ、とも知っていた』

おじいさんの口から「死」と言う後ろ向きな言葉が出てくるのは初めてだった。それと同時に非常に驚いたよ。おじいさんはいつも勇敢で前向きで、自分の考えを臆することなく他人にぶつけて、そして、いつも生き生きしていたから。

『おじいさん？』
『しかし、情けないことに妻を看取ったようにワシのことを誰かに看取って欲しい、その役目をお前さんに頼みたい。そう、心のどこかで願ってしまっていたのだ。ワシは』

おじいさんは僕に背を向けた。しかし言葉を終わらせはしなかった。
『無理を承知で頼む。ワシの最期を看取ってくれるだろうか？』

おじいさんが時々辛そうに歩いたり、常備薬を飲んでいたりところを見たことはある。しかし実際に本人の口からそんな言葉を聞くのとは意味が違ったし、受ける衝撃も大きかった。だが、僕はその時点で覚悟を決めたんだ。なぜなら

『わかりました。出来るだけそばにいます』
彼の不幸は孤独で死ぬこと、だと悟ったんだ。他人の

不幸が幸せなのは、自分が直面する最期から目を必死にそらそうとして自分で作り出した嘘の優越感だったんだとようやく気付いた。

こうして僕はおじいさんの家にしばらくいさせてもらうことにした。両親にはおじいさんから電話したようだった。洪々だが了承してくれたし、おじいさんがなくなつたときは近所の人と協力して葬儀などいろいろ手配する、と言ってくれた。そうして最後の日が訪れるまで僕はおじいさんのそばにいた。そして、冬休みが明けて中学校最後の学期が始まる日、おじいさんは僕が見守る中、静かに息を引き取った。彼の表情は穏やかで満ち足りたようなものだった。

彼女はそこまで言うと、一度締めくくつた。とても満足気な声色だったが、釈然としない。

「で、君は結局不幸になつてないか？」

「え、なんでかな？」

「だつておじいさん死んでしまったじゃないか」

彼女はキョトンとしていたが、

「なんでそれが不幸なんだい？」

また聞き返してくる。いまいち話が通じていない。

「だつて、他人とはいえ知り合いが死んでしまったら悲しいじゃないか。悲しいのなら不幸であると言えるじゃないか」

「あれえ？言つてなかつたっけ？」

なんとなく嫌な予感がした。この女は他人が幸せであれば自分も幸せである、と言う人生観を持っているやつだ。そしておじいさんの不幸は孤独死する未来だった。

しかし、それを解決し、彼は幸せに息を引き取つたと言ふことは……

「おじいさんが死ぬことは遅かれ早かれ避けられないことじゃないか。もちろんよく見知つた人が死ぬのは悲しいと言える。だけど僕はおじいさんの不幸を解決し、最後は幸せを感じてくれていたんだ。僕にとつてそれはとても幸せなことなんだ」

「そう……か」

「それにおじいさんは僕にもっと幸せになれることを教えてくれたんだ」

彼女の話はさらに続くようだった。私はもう少し付き合うことにした。

始業式を終え、その翌日。僕はおじいさんの通夜に向かった。おじいさんの親戚を名乗る人に感謝され、三日目が終わった後の会食ではおじいさんの知らなかつた一面を知ることができた。実は同じ小学校を卒業していたこと。猟師をする前は遠い大都市でサラリーマンをやつていたこと。奥さんとはその時に知り合つて結婚したらしい。奥さんの写真を見せてもらったが、笑顔が素敵なんだつたよ。会食を終え、僕はおじいさんの家に行った。暖炉の中は白い灰がそのままになっており、剥製は静かに僕を見下ろしていた。おじいさんが剥製について言つていたことを思い出す。

「僕、小学生の頃昆虫の標本作つてたんだけど、剥製つてどうやって作るの？」

『剥製か……簡単に言うと皮だけの状態にして、皮が腐らないように薬を塗つて、中に詰め物をするんだ。結構大変なんだぞ』

『そうなんだ……』

『剥製はな、こいつが生きてた証さ。生きて野山を駆け巡り、死んで誰かの一部になる。これが繰り返されるの

がワシら人間も含めた全ての動物というものだ』

『ねえ、おじいさん。この子は幸せだったかなあ？』
おじいさんは少し考え込んでいたが、やがて口を開いた。

『この鹿はワシに銃で撃たれて死んだ。そして他の生き物の腹を満たした。それが運命付けられていたんだ。仮定することは意味を持たないかもしれないが、ワシが撃たなくても熊に襲われたかもしれないし、そのまま大往生を遂げて自然の中で朽ち果てて行ったのかもしれない。しかし何れにせよ、誰かの一部になっていくことを受け入れるであろう。それが運命だから』

柄にもないことを喋ってしまった、とおじいさんは背中を向けてしまったが、僕は自分の持論である『誰かの幸せが自分の幸せ』が間違っていないことを確信したよ。そしておじいさんの最後の言葉も思い出した。

『いいか、死ぬと言うことは今まで経験したたくさんの出来事をお前さんのように標本にしたり、ワシのように剥製にして永久にとどめておく、と言うことだ。嫌なこととはたくさんあったが、最後にお前のような心優しい子に見送られて幸せだ。ありがどうな』

幸せを標本や剥製のように永遠にとどめておくことができる。何度も思い返して、僕は次の行動を決めた。そう

「お、おい待て！ それ以上話すな！」

「なんで慌てるんだい？ これからがいいところなのに」

「待ってくれ。二年前、とんでもない事件があったな」

女子中学生、そして死と剥製。頭の中で一致する事件があった。しかし本当にそうなら

「隣町の人を全て殺したと言うのはまさか……君なの

か？」

当たって欲しくない。そんな思いで恐る恐る聞いてみる。すると彼女は立ち上がった。とても嬉しそうな声色の返答とともに。

「ご名答だよ。いや覚えてくれている人がいたなんて。僕が逃げている二、三年の間に忘れられているかと思っただよ」

私は完全に動揺していた。町の人々のために自ら行動し、将来を囑望されていた中学生の少女。しかし一夜にして町の住人百余人を殺害し、剥製にしようとしていたところを他の町からやってきた警官に見つかり拘束された。精神鑑定の結果、心神喪失と認定され、治療を受ける予定の病院へ搬送中に逃走し、ここ二年近く行方をくらましていた。そんな精神異常者が目の前にいるのだ。私は警棒を取り出し、殺人鬼に相対する。

「警備員さん、そんな怖がらないでくださいよ。僕はどうやらまともな精神でないようなので犯罪者ではないですよ」

「う、うるさい人殺し！ 今から携帯をかけて警察を呼ぶ！ 言っておくがこちらには正当防衛する権利があるんだからな！」

「警備員さんは今幸せ？」

「は？」

唐突に投げかけられる質問。先ほどからこの殺人鬼の真意はどうにもつかめない。そこが頭の狂ったサイコパスだと言われている所以なのだろう。

「そ、そんなこと今関係ないだろう！」

「困ったなあ、是非とも答えていただきたいんだけどねえ……」

彼女はフェンスに手をかけた。こちら側に来る気だ。

殺される。恐怖が全身を覆う。

「幸せなわけないだろう！」

そんな言葉が口をついて出た。彼女の手が止まった。
「……なんでかな？」

彼女はただ静かに微笑んで聞いてきた。

「え、あ、いや」

「幸せでないなら話してみてもいいよ。僕が解決できることならしてあげるから」

私は震える手を抑えて声を荒げた。

「目の前に大量殺人を犯したやつがいるんだぞ！ しかも殺したやつを剥製にするだなんて……狂ってる！ そんなやつをすぐ目の前にして、自分も殺されるんじゃないかという恐怖の中で幸せか？ そんなわけないだろう！ 頼むから私の目の前から消えてくれ！」

私はそこまで言い切るとスマホを取り出し、警察の電話番号を打ち込んだ。

「そうか」

彼女はそう言って私に背を向けた。私が発信のボタンを押すのとほぼ同時だった。

「君は僕が消えたら幸せになる。僕は今幸せだから死んでこの幸福感を永久に感じていたいと思う。これは天の配剤というものかもしれないね」

そしてそのまま彼女はビルの外へ身を投げ出した。まるでそこに何者もいなかったかのようにあっけない幕切れだった。しばらくすると細く長く響く悲鳴が聞こえた。彼女がいた空間を見つめながらスマホを耳に当てると、警察につながっていたらしい。応対する人が困ったように「イタズラ電話なら切りますよ」と言っていた。私は努めて平常な声で告げた。

「じ……自殺です。中央通り二丁目の中央ビル屋上から、

今しがた、目の前で、女の子が飛び降りました」

あとがき

初めましての方は初めまして。二年以上の方はいい作品書いてますか？アイザックことうっかりメイです。編集の方いつもお疲れ様です。二日前までに提出するとかほざいてましたが無理でした。すみません！この場を借りて謝罪と感謝を述べます。さて、いつもはSFが多いのですが、今回はサスペンスチックなものになりました。あとがきを書くのは二回目なので「いつもは〜」なんて言えないのですが、いつもは作品での背景を説明しています。(作品内で完結しろ定期)しかし今回は説明しなればならないことなのでキャラ設定について一言。今回の主人公である少女ですが、一人称が「僕」と言う風になっています。作品を書きはじめたのは提出する三日前のことなので名前もないキャラですが、なぜこの一人称を選んだのか考えていました。結論から言うと、私を知る限りでは「僕」なり「ボク」を一人称にしている女性キャラや女性にまともな人がいないからだと思っています。皆さんはどうでしょうか？(ちなみに単純にボクっ子が好きだからと言う理由もあつたりなかったり)